

九州大学における教育の国際化と質保証への取組

JUNBA2013サミット報告 (2013年1月12日)



九州大学

- 自ら創造し再構築し続ける先駆的人材の育成
- 学士課程ではアクティブ・ラーナー、大学院課程では基幹(教育)を通じた新たな分野の開拓と、未だ知られざる領域の創造
- 「学び」の質的転換こそが重要課題(基幹)
学び方を学ぶ
 - ✓ “課題そのものを学ぶ”から、“課題を通じて学ぶ”へ
 - ✓ “英語を学ぶ”から、“英語で学ぶ”へ
 - ✓ “他者と競う(個に閉じた学び)”から、“自らを知り、他者と協力する(他者や状況へ開かれた学び)”へ
- その実効化には、責任をもって主導できる組織の実現が急務(基幹教育院)
- 基幹教育とG30両者の試みを将来的には統合

基幹教育院とは

教育に対する熱意と、優れた教育実践・研究能力を備えた教員で組織＝学内から移籍＋新規採用＋外国人教員（この他、学内の様々な分野の専任教員と国際機関、産学官から招く講師が基幹教育を担当）

H23年10月：基幹教育院設置

H25年度末までに、基幹教育の新カリキュラムと各学部の新カリキュラムを検討し、H26年度から基幹教育を実施

分野を越えて学生が知の交流を図ることのできるクラス編制の基に多様な分野の基礎知識を多様な教授形態で施し、学生に(1)省察的思考を伴う創造的・批判的精神、(2)柔軟性のある思考や態度、(3)広い視野と俯瞰力、(4)倫理や道徳に対する深淵な理解、(5)謙虚な心と豊かな感性、(6)人間性に対する深い理解を身につけることを目的とする。

授業例

週2コマ4単位の授業

知識・理解を深める<Lecture>型授業(大規模クラス)に加え態度・志向を身につける<Seminar>型授業(小規模クラス)を実施

<Lecture>で出題されたテーマに沿って<Seminar>の事前準備、授業後の復習など自主学習の時間を確保←サポーター、アドバイザーの関与 ex. 図書館や教材開発センターの積極的活用



(これまでの取組)

グローバル人材の育成

21世紀プログラム(H12～)
自ら問題を発見、課題を設定し、学部の枠を超え学修する、**テラーメイドの教育課程**

大学院共通教育(H18～)
専門性に加えて、その専門性を活かすための幅広い分野の学修を提供する**学府横断型のカリキュラム**

全学的な英語コース設置(H21～)
2学部(農・工)、全学府(60コース)で**英語コース**を開講、日中韓人材育成プログラム「**キャンパスアジア**」への参画

全学的な組織改編を促す多様な制度の導入

学府・研究院制度(H12～)
教育組織と研究組織の分離により、**柔軟な組織編成**が可能。システム生命科学府(H15～)、統合新領域学府(H21～)

主幹教授制度(H20～)
エース級の研究者を給与面で優遇、外国人研究者の雇用経費を措置

大学改革活性化制度(H23～)
部局から教員ポストの1%を拠出させ、各部局の改革計画を評価し、**重要性の高い計画に必要な教員ポストを戦略的に配分**

世界水準の教育課程とそれを可能にする思い切った組織編成を更に強化

アクティブ・ラーナーを養成する新たな学士課程教育モデルの構築

基幹教育院の設置

教育への熱意と、優れた教育実践・研究能力「**トップクラスの教員**」で組織

- ★ 学内から移動
- ★ 新規ポスト(学外から)
- ★ 外国人教員

基幹教育院の約1/3が **役員会による教員人事**
外国人教員(目標)

◎この他、
学内の様々な分野の専任教員と
国際機関、産学官から招く講師が
基幹教育を担当

国際的に通用する教育の質保証

- 従来の教養教育の枠を超越したカリキュラムを開発

対話型、課題発見型授業の展開(**300コマ実施**)

「英語の授業」から「**英語による授業**」への転換
(英語による授業を全開講科目の**25%**に)

海外体験プログラムを**1学年500人**規模で実施

Web教材活用等による**予習復習の徹底**

教育方法の革新と**新たな教材開発**

大学改革の強化

世界水準の教育課程の展開

- ・**グローバル化**する世界において**リーダーシップ**を発揮し、**様々な領域で課題解決**に貢献できる人材を育成
- ・TOEFL学部学生卒業時平均を **460 から 500**に
- ・学修時間を**欧米並み**に

メリハリある資源の再配分

**国際教養学部・学府の設置に向けた
研究院・学府・学部の大規模な再編**

開発教材とノウハウを他大学に提供